平成２３年度　　桐光学園中学校（国語）　　解答と解説

解 答

①

１　**イ**　　２　**ア**　　３　**イ**　　４　**ウ**　　５　**エ**

②

問一　**エ**　　問二　(1) **ウ**　　(2) **言いがかりをつけて、心平の捕った魚を横どりしようとたくらむこと。**

問三　**ア**　　問四　**ウ**　　問五　**ウ**　　問六　**イ**

問七　**いやがる小百合の頭を押さえつけてまで、耳の中を無理やりのぞきこもうとする中学生たちに腹が立ち、彼女のことを救いたい一心で我を忘れている。**

問八　**イ**　　問九　**ア**　　問十　**イ**

③

問一　**エ・カ**　　問二　**ア・オ**　　問三　**ア**　　問四　**イ**　　問五　**イ**

問六　２　**エ**　　３　**ウ**　　問七　**イ**　　問八　**自然の～できる**〔ということ。〕

問九　**ア**　　問十　**仮説を検証する作業**

解 説

① 同音異義語ばかりです。文意を理解した上で、選びましょう。

② 出典は、川上健一「雨鱒の川」(集英社)。小学生５人の人物関係をきちんと押さえます。絵を描くのが大好きな心平と小百合は仲の良い幼なじみです。小百合は耳と会話が不自由です。英蔵はガキ大将で、ヒロシとアキラという腰巾着がいます。英蔵は小百合に惚れていますが、手下の二人はそれに気がついていないようです。次に、あらすじです。小百合の婆っちゃにあげるために心平が捕った魚を、英蔵たちが言いがかりを付けて横取りしようとします。二人が言い争いをしているところに、野太い声の中学生が二人現れます。彼らが小百合をいじめるのを見て、まず心平が、続けて英蔵が中学生たちにつかみかかっていきます。偶然通りかかった農夫のおかげで、ことは納まりますが、興奮さめやらぬなか、体を張って助けてくれた英蔵に小百合は感謝し、心平もまた感謝の印として英蔵に魚を差し出します。

問一　主に体の一部を含んだ慣用句を選ぶ問題です。

問二（１）「腹に一物ある」という慣用表現の意味を選びます。（２）英蔵は「何をたくらんでいるのか」を具体的に記述する問いです。この後の英蔵の会話に注目します。標準語に直せば、「責任をとれ」「心平が川の勢い止めを荒らしたせいで、魚が捕れなかったんだから」「魚を半分よこせ」・・・この三カ所をうまく利用してまとめます。

問三　小百合は首を振るというしぐさで、英蔵にやめて欲しいと訴えます。それに対して彼は自らの正当性を、言葉で小百合に伝えようとしますが、そんなことをしても「何も聞こえない」小百合には無駄だ、「ばかだな」とヒロシは言いたいのです。

問四　心平と小百合は「バカ同士」なので、お互い意思が通じ合うのだと、ヒロシは「小馬鹿にして」言います。惚れている小百合を馬鹿呼ばわりされて、英蔵は腹立たしさから「にらみつけ」ますが、それは小百合のことが好きだと態度に表していることになると気づき、恥ずかしさで「顔を赤く」したのです。

問五　この後の場面展開を読み取ります。中学生たちは、当初、心平が絵を描いてばかりいることに興味津々でしたが、小百合が耳の不自由な子だと気づくや、いやがる頭を押さえつけて耳の中をのぞき込もうとします。そして、これをきっかけにして、心平にとっては、先刻の英蔵との言い争いよりもっと「大きな困難」が襲い掛かってくることになるのです。

問六　英蔵はいったい何のために中学生に対して、心平の馬鹿さ加減を吹聴しているのでしょうか。直後の一文に注目します。「英蔵は勝ち誇ったように小百合をみた」。小百合の前で、心平をおとしめ、一方、自分の賢さを見せつけたかったのです。

問七　記述に含めるべきポイントは三点です。中学生たちのいたずらに対して叫び、抵抗する小百合を見て、心平は「顔色を変え」て「中学生たちにつかみかかって」いきます。ここから、①　小百合を助けたい　②　中学生たちへの怒り、の二点が抽出できます。また、「抱えていた布袋を放り投げる」という行為から、③　大事な魚のことなど念頭からなくなるくらい「無我夢中」・「我を忘れた」・「必死だ」などの「気持ちを表す」言葉が必要になります。

問八　中学生たちが逃げ去ったあと、小百合は英蔵にどういう気持ちを伝えたかったのでしょうか。会話が不自由な小百合に代わって心平が言います。「ありがとって、小百合が」。小百合は、自分を救い、心平の手助けをしてくれた英蔵に「感謝」しているのです。

問九　問八とつなげて解きます。惚れている小百合から「感謝」の言葉をかけられたので、「嬉し」かったのです。

問十　問八を参考にします。英蔵が体を投げ出して中学生たちに突っ込み、心平と小百合を救おうとしてくれたこと、そのことに小百合と同様に心平もまた「感謝」の気持ちでいっぱいなのです。「魚」はそのお礼の印であり、また、可愛い小百合の身を守るという点で「心が通じ合えた」と解釈することもできるでしょう。

3　出典は、阿部芳郎（あべよしろう）「考古学の挑戦」（岩波書店）。

問一　選択肢の中には、「一長一短」「一進一退」「一期一会」「一世一代」の四つの四字熟語が隠れています。

問二　「名詞＋の＋名詞」の形を二つ選びます。イ「その」（＝連体詞）　ウ「の」（＝「が」に置き換えられる、主語を表す意味）　エ「の」（＝「こと」という形式名詞に置き換えできる）

問三　［W］の直前の一文「実験とは～」に注目すると、最初に来る文は、科学における「実験」の意義、「実験」とは何かについて述べ始める文が来ます。次に、実験における「仮説」の必要性を述べる文が来るのです。

問四　［Ⅰ］は、「なぜなら～から」でもいいし、「さしあたり～除けば」でもいいので、（イ）でも（ウ）でもよい。［Ⅱ］には逆接が入るので、「しかし」の（イ）だけが残ることになります。

問五　――線１より前の内容を読みます。ここでの「看板」とは、「中身」の反対語で、「一見すると」や「表向き」と同じような意味です。「実験」という名前は、この分野の中身をよく理解しないまま、「モノ作りにつながる楽しさ」につながるイメージばかりを喚起してしまっているという文意です。

問六　辞書的な意味を知っておくと同時に、本文の文脈に沿った解釈を心がけましょう。

問七　――線４のあと「それは～」以下の一文に注目します。この一文は、直前の段落内の「意図的に粘土や砂や繊維などを混ぜ込んで作られた」を受けていますが、では、なぜ「粘土や砂や繊維などを混ぜ込んで」縄文土器が作られたのかという「問題」が「未解決」だという文脈です。

問八　「さきほどの結論」とは、――線４の直前の「この結論」を指しています。「この結論」とは、その直前の段落内の「自然の中で粘土や土が混ざったものを使えば、充分に土器を作ることができる」を指しています。

問九　前の方の「そして実験考古学において大切なことは～」という、筆者の主張を含んだ一文（一段落）に注目します。「仮説に合致する結果が得られたとしても、それが唯一の方法であるとは単純に考えずに、さらに同じ結論を支持するような手がかりを積み上げたり、同じ結論をみちびく他の方法がないかどうかを確認すること」。この確認をおこたることを「大きな間違い」と指摘しているのです。

問十　「わたしの実験考古学の持論」だという「仮説のないモノ作りは実演であっても実験ではない」という主張に注目します。つまり、「仮説あってこその実験だ」という内容を十字以内で探します。